

「キリスト教と民族」という問いへのアプローチ

A. 宗教と文化

1. 類型論

H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, Harper & Brothers, 1951

Christ Against Culture / The Christ of Culture / Christ Above Culture /

Christ and Culture in Paradox /

Christ the Transformer of Culture

変革者キリスト

2. 歴史論・啓示史

Paul Tillich, *Systematic Theology. vol.1*, The University of Chicago Press, 1951

The Dynamics of Revelation: Original Revelation / Dependent Revelation

The final revelation divides the history of revelation into a period of preparation and a period of reception. (138)

B. 言語論・社会的構想力の問題としてのアプローチ

メタファー化

家族 / 民族

<メタファー論に向けて>

Jurgen Moltmann, *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*,
Chr. Kaiser 1999.

Theologische Erkenntnistheorie (S.139-165)

他なるもの・異質なものの認識プロセス、新しい知の生成メカニズム

区別 (区別1)	より大きな類似	より大きな区別 (区別2)
異	同・類似	異
虚構と現実とは異なる	虚構と現実の相互依存・絡み合い	それでも虚構と現実とは区別されねばならない

<メタファー論の前提・背景>

現代思想と言語論

共通認識：言語から人間・社会を論じる

cf. ドイツ観念論

意味と指示の区別、言語の階層性 (語 / 文 / 文章 / テキスト)

<メタファー論>

(1) 区別1：伝統的古典的な言語論 (伝統的な隠喩論) とその問題性

(2) 類似 (ブラック、ヘッセ / リクール / レイコフ、瀬戸)

「最近の四半世紀におけるイエスの譬え解釈が明確に主張しているのは、イエスの譬えが期待と慣習的な道徳的規範とを流動化と混乱を通して転倒させるということである」(ibid.,p.50)。

母・恋人・友としての神(God as Mother, Lover, Friend)

< 導入 3 > 家族・民族のメタファー化

1 問題 (< 導入 1 > より)

1. 歴史的実在としてのキリスト教を構成する「自己同一性と状況適応性」(モルトマン)の両極構造

「キリスト教と民族」問題の基本構造

2. 「自然と文化」「古代と近代」という二つの軸
- 虚構としての民族
 - 課題としての民族
 - 日本のキリスト教はいかなる日本民族の構築をめざすのか

3. 18世紀の西欧における国民国家の理念

2 内村鑑三と愛国心

4. 自己同一性を失わず、民族的状況に埋没することなく、キリスト教は民族と民族主義とにどのように向かい合うことができるのであろうか。

5. 内村鑑三の場合

内村は反民族主義者か？

内村の有名な「二つのJ」(Jesus と Japan の二つへの愛)

愛国者、民族主義者としての内村

6. 「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」(1885年、新島襄宛の手紙)

7. キリスト者としての自己同一性の原点である Jesus と適応すべき状況としての Japan、この双方を同時に愛する、これはどのようにして可能になったのであろうか。

8. 内村の非戦論の形成過程から

(1) 日清戦争は東洋の近代化のための義戦である (『日本人の天職』(1892年)

「日清戦争の目的如何」(1894年))

(2) 「< 義戦 > はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の < 正義 > を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」(アメリカの友人ベル宛の書簡)

(3) 「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」(「戦争廃止論」)

9. 問題：そもそも、愛国とは何か。

10. 「日本」：内村が生まれ生きてきた歴史的状況であり、内村の人生・生命・生活が具体的な形をとる場 = 実体原理。

11. 「イエス」：批判原理・修正原理
12. 「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」
「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉍毒地巡遊記」)
13. カント：幸福と正義(福と徳)との関係性
キリスト教：隣人愛と神への愛の関係
14. 愛国思想の内実：農業を中心とした非軍事的な小国としての日本
「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、
実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の
勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神あり
て国は戦争に負けても衰えませんが、否な、其の正反対が事実であります」、
「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀では
ありません、信仰であります。」(「デンマルク国の話」『後世への最大遺物・デンマル
ク国の話』岩波文庫)
内村の「神の国」理解という問題
15. 古代イスラエルの預言者の思想と生き方 自己超越的な民族主義
16. キリスト教信仰と民族への愛とは矛盾しない もちろん、この実体的基盤の中身が
問題であるが 。しかし、実体原理としての民族には、しばしば逸脱・歪みが生じる(罪
という問題、あるいはティリッヒの言う疎外、両義性)。自民族中心主義・排他主義はその
逸脱・歪みの典型であり、逸脱した実体原理は修正と批判を必要とする。修正・批判原
理は実体原理としての民族よりも上位に位置付けられねばならない。キリスト教は実体原
理としての民族を、正義あるいは神との関わりという視点から批判し、その逸脱を正すこ
とによってはじめて、真の意味において民族に貢献することが可能になる。内村にとって、
間違った近代化を推進しつつある民族主義を批判することは、まさに真の愛国と同一の事
柄だったのである。

3 家族のメタファー化から民族へ

17. 民族と家族との類比。東アジアの伝統。
18. 「人間集団は時間が経過するについてその構成員が必然的に入れ替わる以上、
構成員自体の同一性を語ることはできない。そこで出てくる発想の一つに、民族
には超歴史的な本質が内在し、構成員とは別にあるいは独立に実在し続ける
というものがある。」(小坂井、2002、30頁)
19. 民族とは、血縁的つながりの延長上に自然に成立するものではなく、物語(民族起
源神話)を介して、共同体的な構想力の作用に支えられてはじめて形成される。
20. 民族を構成する構想力の素材としての「家族」「家」
21. 家族のメタファー化。イエスの宗教運動の家族論。
家族論の歴史性：創世記の創造物語における家族の描写(創世記2.24)と西欧近代
の一夫一婦制の類比
古代の地中海世界およびイスラエルの家族制度
22. 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和では
なく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人

をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない。」(マタイ 10:34-37)

「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子にいわれた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」(ヨハネ 19:25-27)

「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。」(マルコ 3:34-35)

23. 「最終的に最後のアフォーリズムにおいて、イエスの家族に対する攻撃の論点はきわめて明瞭になっている。5人のメンバーからなる標準的な地中海的家族、つまり母と父、妻をもった既婚の息子と未婚の娘という拡大核家族全員が一つ屋根の下で生活していることを想像いただきたい。イエスは、自分はこの家族を引き裂くと述べているのである。……この攻撃は信仰に関わっているのではなく、権力に関わっている。攻撃は父母を息子、娘、嫁の上に置く地中海的家族の権力軸に加えられているのである。」(Crossan,1994, pp.59-60)

24. テキスト と テキスト ・ との間に見られる「家族」の意味転換プロセス = 「家族のメタファー化」、「批判(否定) 転換 拡張(肯定)」という意味転換プロセス。
家族についての新しい理解の生成、「血の絆」という自然的関係性から「神のみこころ」という精神的関係性への意味のメタフォルカルな移行

25. 内村鑑三の自己超越的民族主義 = 民族のメタファー化
内村においては、同時代において展開しつつあった日本の民族主義あるいは愛国論に対して、同じ「日本を愛する」という言葉を使用しつつも、その意味内容が自民族中心主義を相対化するものへと転換されていたわけであり(自己超越的民族主義)、これについては、イエスの宗教運動における家族のメタファー化と同様の意味において、民族のメタファー化と呼ぶことが可能である。

おわりに

26. 宗教的多元性の状況下のすべての諸宗教の共通課題としての民族のメタファー化
宗教間対話の意義
宗教間対話の場としての「公共性」の生成

<文献>

1. 民族について

- ・ 蓮實重彦・山内昌之編 『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。
- ・ 小熊英二 『単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜』新曜社、1995年。
- ・ 小坂井敏晶 『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。

2. 東アジアという問題設定について

- ・宮嶋博史・李成市他編『植民地近代の視座 朝鮮と日本』岩波書店、2004年。
宮嶋博史「東アジアにおける近代化、植民地化をどう捉えるか」
李 榮薫「民族史から文明史への転換のために」
- 3 . キリスト教思想と民族・家族
- ・Jurgen Moltmann, *Der gekreuzigte Gott*, Chr. Kaiser 1972.
I. Identität und Relevanz des Glaubens, S.12-33.
 - ・Paul Tillich, *Die sozialistische Entscheidung* 1933, in: *Main Works · Hauptwerke* 3, de Gruyter, 1998.
 - ・John Diminic Cressan, *Jesus. A Revolutionary Biography*, Harper San Francisco, 1994
 - ・芦名定道 「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『対話と寛容の知を求めて 人文学の未来』(下巻 『新たな人類知を求めて』) 京都大学学術出版、2007年(予定)。
「ティリッヒと宗教社会主義」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第11号、2007年(予定)。
 - ・芦名定道 「東アジアの宗教状況とキリスト教 - 家族という視点から - 」、
『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会)創刊号 2003年、1-17頁。
- 4 . 日本のキリスト教、とくに内村鑑三
- ・土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
 - ・宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978年。
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書、1971年。
 - ・関根正雄編著『内村鑑三』清水書院、1967年。
 - ・『内村鑑三全集』『内村鑑三著作集』岩波書店。
 - ・鈴木範久監修、藤田豊編『内村鑑三著作・研究目録』教文館、2003年。
 - ・芦名定道 「第5章 民族主義と平和、第3講 思想」、芦名定道・土井健司・辻学『現代を生きるキリスト教』(改訂新版)教文館、2004年。